

〈中本正智博士 著書紹介〉 『琉球方言音韻
の研究』

内間, 直仁

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

80

(終了ページ / End Page)

83

(発行年 / Year)

1995-02-24

『琉球方言音韻の研究』

内 間 直 仁

本書は、中本さんの最初の単著である。中本さんは、共著ではありながら、すでに『琉球与那国方言の研究』『琉球方言の総合的研究』『琉球先島方言の総合的研究』をものしている。この三著をなすにあたって、昭和38年から41年にかけての精力的な琉球方言調査によって、中本さんの言語研究の基盤が磐石のものとなったとみてよいであろう。その調査によって、中本さんは、琉球方言の音韻、アクセント、文法、語彙の各分野にわたる実態を概略把握していて、たとえ音韻という一部門であったとしても、それをアクセント、文法などとの関係のなかで相対的に位置付けて考察する幅広い視野をもっていたといえよう。

このような堅固な基礎の基に、音韻に焦点を当て、比較言語学的方法を用いて研究しまとめたのが『琉球方言音韻の研究』である。中本さん40歳の時の成果である。中本さんの音声観察はきわめて正確で、自分が有していない音声の獲得能力も抜群であった。奄美喜界島志戸桶方言を調査したとき、私などは、eの発音について、話者からなかなか合格点をもらえなかったが、中本さんは一度に合格したのを覚えている。

『琉球方言音韻の研究』は、琉球方言音韻の記述的研究においても、また通時的研究においても随一の研究書である。本書の特徴は次の点にある。

- (1) 中本さんというネイティブの優れた音声学学者による精緻な記述研究である。中本さんは、沖縄玉城村奥武島の出身である。琉球大学では仲宗根政善元琉球大学教授（現名誉教授）について方言学を学び、東京大学研究生時代には服部二郎博士について音声学を学びつつ、厳しい訓練を受けている。さらに、東京都立大学では平山輝男博士の指導を受けつつ、琉球方言の長期の実地調査を体験している。このような日本を代表する言語学者の指導のもとで、中本さんは、理論と実践を兼ね備えた優秀な音声学学者・言語学者となる。中本さんによる琉球方言の記述研究は、高い信頼性をもって研究者に受け入れられている。
- (2) 本書の資料は、中本さんという同一研究者による調査資料で、音声の聞き取りに斑がない。このような統一された資料が与那国から奄美諸島まで整理体系化されて示されている。
- (3) 本書は、琉球方言研究の歴史を概観し（琉球方言研究史を整理し、時代区分したのも本書が初めてである）。これから向かうべき研究の方向を示しつつ、本書の研究の位置付けをしている。

- (4) 本書は、母音体系、子音体系の変遷を実証的に考察していく過程の中で、「P音考」(伊波普猶『古琉球』 明治44年 平凡社全集第一巻所収)、「琉球語の母音組織と口蓋化の法則」(伊波普猶『南島方言史巧』 昭和9年 平凡社全集第四巻所収)、『日本語の系統』(服部四郎 昭和34年 岩波書店)などで示された比較言語学的方法をより確実なものにし、発展せしめた。

以上のように、本書は、広域にわたる精度の高い記述資料に基づいて、比較言語学的方法を駆使して通時的研究を行なった琉球方言音韻研究の随一の研究書となっている。本書の内容は、概略次のように構成されている。

I 序説

- 1 琉球方言研究概観
- 2 琉球方言の成立と区画
- 3 音節における子音と母音そして拍

II 音韻変化の通時的考察

- 1 母音変化の通時的考察
- 2 子音変化の通時的考察

III 音韻実態の記述的研究

- 1 与那国方言の音韻
- 2 八重山方言の音韻
- 3 宮古方言の音韻
- 4 沖縄方言の音韻
- 5 奄美方言の音韻
- 6 琉球諸方言の音節の類別
- 7 音韻現象の諸相

IV 付録

琉球諸方言の音韻対応語彙表

第I章では、琉球方言研究の歴史、琉球方言の特徴とその区画、琉球方言の拍と音節、などについて述べている。琉球方言研究史では、時期を、第1期資料編纂期(江戸末期以前)、第2期文典編纂期(江戸末期から明治28年頃まで)、第3期方言採集期(明治28年から大正末期まで)、第4期比較対照期(大正末期から昭和30年頃まで)、第5期分析総合期(昭和30年頃から現在まで)に分け、各期の研究状況について概観している。琉球方言研究史を現代にまでわたって、その特徴をとらえて時代区分し、各研究を位置付けたのは本書が初めてである。続いて、琉球方言の特徴をとらえて方言区画を示し、さらに拍と音節の関係についても論じている。

第II章は、音韻変化の通時的考察で、中本さんがもっとも力点を置いたところである。琉

球方言における母音変化とカ行・ハ行子音の変化をダイナミックに関連づけて論述している。琉球方言の基幹にかかわる音韻変化を、構造的、体系的にこれほど有機的に理論的に解明した論文は、これ以前にも以後にもない。

母音変化では、現在の実態から明確にたどれる祖形として五母音体系を設定する。まず、変化の第1過程として、 $o \rightarrow u$ をあげる。この変化を円滑ならしめたのは、 au 、 ao などの連母音が融合して $o:$ を形成し、 o の周辺に音声上の類似音が増加したためであると推定している。 $o \rightarrow u$ の変化は琉球方言全体に起こっているところからすれば、 e の狭母音化よりはやや早い時期に起こったものとみている。母音変化の第2過程として、 e の狭母音化をあげる。奄美・沖縄方言では、 $e \rightarrow \bar{e} \rightarrow \bar{i} \rightarrow i$ と変化する、宮古・八重山方言では $e \rightarrow i$ にともない、もとの i はさらに \bar{i} または \bar{y} に変化したことを明らかにする。この変化に拍車をかけたのは、 $o \rightarrow u$ の場合と同様に、 ai 、 ae などの連母音が融合して $e:$ を形成し、 e の周辺に音声上の類似音が増加したためと推定している。

子音変化では、カ行とハ行の子音変化を取り上げている。カ行子音は、奄美・沖縄方言では、 $e \rightarrow \bar{i}$ 、 $o \rightarrow u$ の変化にともなって、イ段・ウ段子音は無気・喉頭化音 k' に変化し、エ段・オ段子音の非喉頭化音 k とは区別を保つようになるという。また、 e は、 $e \rightarrow \bar{i} \rightarrow i$ と変化し、 i に統合していくようになるが、 $\bar{i} \rightarrow i$ の時期にイ段子音は、 $k \rightarrow tʃ \rightarrow ʃ$ の変化を起こしているという。先島方言では、 $o \rightarrow u$ の変化にともなって、ウ段子音は f に変化しているが、 $e \rightarrow i$ の変化では、母音そのものが変化し、もとの i が \bar{i} または \bar{y} に変質したという。その変化の時期に、イ段子音も $k \rightarrow ts \rightarrow s$ と変化したものもあるという。

ハ行子音も同じく、奄美・沖縄方言では、母音の狭母音化で、イ・ウ段とエ・オ段とを区別するために、 p' と P に分化し、音韻的対立を生じたとみる。その p' もやがて無気・喉頭化がうすれてなくなると、 $P \rightarrow F$ の変化を起こすようになるが、すでに $k \rightarrow h$ の変化を起こしている方言では、これと統合することをさけて、 P 音をそのまま留めるようになったと推定している。一方、先島方言では母音の狭母音化で、ウ段とオ段とを、区別するために、ハ行子音は f と P に分化して音韻的対立を生じ、八重山方言ではさらに $f \rightarrow F$ の変化を起こしているとみる。

このカ行・ハ行子音の変化を説くにあたって、中本さんはカ行子音を15種、ハ行子音を9種に分類して、その変化の過程を丹念に考察している。

以上のように、琉球方言の音韻の変化を、母音と母音、母音と子音、子音と子音という相互関係のもとで、有機的、体系的にとらえて明らかにしていく。その説は、中本さんの長期にわたる実施調査とそこから得られた豊富な資料に裏付けされていて、実に説得的である。日本方言学の中で、現代方言の共時的実態を緻密に記述し、比較言語学的方法を駆使して音韻史を構築したのもとして、中本さんのこの論文に勝るものをまだみたことがない。

第Ⅲ章は、第Ⅱ章の論の基盤となった音韻実態の記述的研究である。与那国・八重山・宮

古・沖縄・奄美の五大方言について、まず代表的な一地点を取り上げ、音素体系、拍体系、音声の特徴、語例を記述し、共通語との音韻対応や音韻上の特徴についても詳しく記述する。その後、それ以外の数地点の方言も取り上げ、各々の音韻について記述している。これらの記述は、きわめて信頼性の高いもので、以後の研究でも、欠かせないものとなっている。たとえば、服部四郎博士の「日本祖語について」（昭和53年1月－12月、昭和54年1月－12月、大修館『言語』に連載）では、本書の記述資料はきわめて重要な役割をはたしている。

第Ⅳ章では、琉球諸方言の音韻が比較対照できるように、約178語について、与那国から奄美諸島に至る琉球列島はもちろんのこと、薩南諸島までも含めた語形が示されている。

本書は、構造言語学の音素論に基づいて音韻の実態を記述し、比較言語学的方法論に基づいて琉球方言の音韻史を記述した典型的な研究書となっているが、それらの方法論も越えて本書の中に横溢しているのは、著者20年にわたる実地調査の中から経験的に獲得した言語に対する鋭い観察と深い洞察である。本書は、時の経過ともますます光を放つ珠玉の名著である。

以上、課された中本正智博士の御著書について紹介してきたが、先輩の中本さんについて、こんなにも早くそういう事態を迎えねばならなかったことがつらく——。ご冥福を心から祈る日々である。



レオン・セラフィン（ハワイ大教授）、クリス・ドレイク（跡見女子大学教授）両氏と語る中本先生（1990年7月法政大学にて）